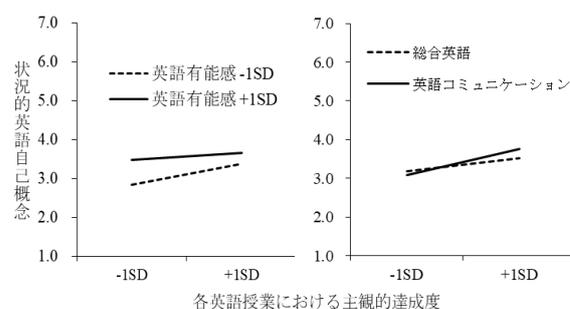


この度の研究支援、誠にありがとうございました。研究成果について、下記の通りご報告いたします。

記

1. 研究課題名	数学・国語授業の達成感が中高生の学業的自己概念を形成する過程の解明 —「授業を受けていない教科」の自己概念への波及効果に着目して—
2. 研究目的	本研究の目的は、個人における学業的自己概念の教科を超えた影響関係を示すことであつた。具体的には、複数の教科（例：数学と国語）の各授業終了時に、その授業の主観的達成度と教科の状況的自己概念のデータを数週間にわたり収集し、それらの関係性を明らかにすることであつた。
3. 研究期間	2022 年 10 月～11 月（予備調査 1）、2023 年 2 月（予備調査 2）、4 月～5 月（本調査） ※予備調査 2 は、調査協力校の都合により、Time 1 のデータ収集のみで中止された。
4. 結果	<p>予備調査 1 では、週に 2 回、大学の異なる 2 つの英語科目の授業で 5 週間にわたりデータを収集し、授業達成度と状況的英語自己概念の関係性を検討した。分析の結果、授業達成度が高いほど自己概念が高いという個人内の共変関係が示された。さらに、その共変関係は、(1) 個人レベルの英語有能感の低い学生において強まること、(2) 英語コミュニケーションの科目において強まること示された (Figure 1)。</p> <p>本調査では、高校生の国語・数学・英語の授業で、5 週間にわたり授業達成度と 3 教科の状況的自己概念のデータを収集した。現在は、データの分析中である。</p>
5. 結論	<p>本研究の結果、状況的自己概念が各授業の達成度に規定されることが示された。さらに、その関係の強さが英語有能感や英語科目によって変化することが示された。英語の自己概念に限定した予備調査の検討だけでも、より全般的な自信（英語有能感）が調整要因になることや、英語科目によってその重みづけが異なるなど、自己概念の階層性に関する理論的想定について、経験サンプリングを通してより詳細に実証できたといえる。今後は、本調査の分析を通して、複数教科の自己概念を含めた上で、本研究の主眼である教科をまたいだ自己概念の形成過程について明らかにしていきたい。</p>
6. 研究成果発表	本研究の一部は、ACP2023、日本教育心理学会第 65 回総会、日本パーソナリティ心理学会第 32 回大会で発表された。今後、本調査の分析の上で論文化を行う予定である。

Figure 1 状況的英語自己概念と授業達成度の共変関係に関する英語有能感と英語科目の調整効果



以上